慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『福沢諭吉全集』(一九六三年刊)未収録 幕末外交文書訳稿十三篇
Sub Title	An addition to the Complete works of Fukuzawa Yukichi : thirteen translations of diplomatic letters that were not included in the 1963 edition
Author	小野, 修三(Ono, Shuzo)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2006
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). No.23 (2006.) ,p.291- 327
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介#正誤訂正あり
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20060000-0291

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第二十三巻（二〇〇六年）
資料紹介

『福沢諭吉全集』（一九六三年刊）未収録 幕末外交文書訳稿十三篇

小野修三

解題・凡例

本稿は慶應義塾福沢研究センターが『福沢関係文書』（マイクロフィルム版）を一九九一年に編集し、雄松堂出版より刊行する際に、福沢諭吉関係資料（F分類）草稿（5）訳稿（B）のなかに収録した『福沢諭吉全集』（一九六三年刊）未収録幕末外交文書訳稿十七篇のうち、東京大学史料編纂所にて二〇〇六年四月現在で複写を許可された同訳稿の十三篇に就き、その複写物と『福沢関係文書』（マイクロフィルム版）の両方を参照して、福沢諭吉による訳稿およびその原本たる外交文書を翻刻したものである。

したがって、本稿のタイトルたる『福沢諭吉全集』に未収録の幕末外交文書訳稿とは、本稿を作成した者たちが見出したそれではなく、かつての『福沢関係文書』（マイクロフィルム版）作成作業のなかで発見されたものであり、言葉の厳密なる意味でのそれではないことを初めにお断りしなければならない。これは一九九一

年度に完成を見た『福沢関係文書』（マイクロフィルム版）の価値を貶める意図での言明ではなく、福沢諭吉が幕末に命じられた外交文書翻訳作業全体を、その原本たる外交文書と共に読み直すことによって、再考察する大きな仕事の第一歩を踏み出す決意の表明と解釈願いたい。

原本たる外交文書については、今回七篇のオランダ語の原文（うち二篇にはフランス語訳とドイツ語訳が付属）と六篇の英語の原文を各訳稿への注として掲載した。本稿ではその七篇のオランダ語、六篇の英語の翻訳また校訂に係わった福沢を紹介することになる。より詳しく言えば、前者のオランダ語の文書のうち今記したように二篇にはフランス語訳とドイツ語訳が付属していたが、その二篇はそれぞれフランスの「全権ミニスケル」（公使）、ドイツの「コンシュル」（領事）からのものであり、本来の意味ではそれらが主文で、それにオランダ語訳が付属していたと言うべきである。したがって、少なくともその二篇に関する限りは、ここでの福沢の訳業は重訳であった。しかし福沢としては当時の日本側の建前と同じく、正文としてオランダ語訳を受け取り、その正文たるオランダ語を翻訳し、回覧に付していたわけである。

今回のこれら原文の判読にはオランダ語に関しては文学部助教授納富信留氏およびオランダ・ユトレヒト大学教授テオ・ファベーク氏、ドイツ語に関しては商学部教授ヴァルター・フォーグル氏、フランス語に関しては同じく商学部専任講師フィリップ・コミネティ氏からそれぞれご協力を賜った。心から厚く感謝申し上げる。とりわけギリシャ哲学がご専門の納富信留氏には現在ユトレヒト大学留学中のところ、同僚のファベーク教授にも協力頂き、大量のオランダ語判読作業に従事して頂いた。オランダの方角に足を向けて寝られない次第である。また、慶應義塾福沢研究センター所長の小室正紀経済学部教授、日吉の同僚ヘレン・ボールハチェット経済学部教授にもご助力頂いた。

なお本稿では、その判読された原文と訳稿との内容に関する比較分析は行なわれていない。その種の比較分析も翻刻作業と平行して今後進めるべき作業であるが、まずは原文と訳稿とが共に公的に利用可能になることに意義があると考えた。

また福沢の職務自体について簡単に説明すれば、鎖国から開国へと政策転換を行なった徳川幕府が、安政五年（一八五八年）七月外交事務処理のために新設した外国奉行に、福沢は「五十之日当番」（『福沢諭吉書簡集』第一巻、四三ページ）、つまり五日、十日、十五日と五日置きに出勤して、「外国の公使領事から政府の閣老又は外国奉行へ差出す書簡を翻訳する」（『福翁自伝』）任務を遂行していた。元治元年（一八六四年）一〇月には「外国奉行支配調役次席翻訳御用被仰付」との任命を受けていたこともその書簡によってわかる（『福沢諭吉書簡集』第一巻、四〇ページ）。ラインとスタッフという区別であれば、スタッフとしての翻訳方の仕事であったが、今日東京大学史料編纂所が「外務省引継文書」として整理・保管している、本稿原文を含む江戸幕府の外交文書を見れば、そのなかに逆に「政府の閣老又は外国奉行」から「外国の公使領事」へ差出された書簡の原文およびその訳稿も、翻訳者の署名はないが、混じっているので、福沢の職務は福沢が証言している以上の事柄もあったのかも知れない。以下の本稿本文中にも見える「返翰」である。

とはいえ、本稿での福沢の翻訳ないし校訂はすべて「外国の公使領事」発の外交文書に関するものである。内訳ではイギリス（不列顛）から四通、オランダ（荷蘭）から三通で、これらはそれぞれ英語、オランダ語で記されていた。これに対してベルギー（白耳義）とスイス（瑞西）からは各二通でそれぞれオランダ語、英語で、そしてフランス（佛蘭）とドイツ（孛漏生）からが各一通で共にオランダ語で記されていた。このフランスとドイツからの文書には、先にも記したように、フランス語、ドイツ語の文書が付属していた。

今回の翻刻の方針は次の通りである。

Ⅰ　表記は原則として原文通りとした。

Ⅱ　判読不能な文字の個所は□で示した。虫喰いの個所は同時にルビで〈虫損〉とその旨を示した。

Ⅲ　抹消されていた箇所については、判読出来る限り記載し、当該個所を〔　〕で括り、行間に〈抹消〉と注記した。

Ⅳ　欧文において不確かだが、こう読むに違いないと思われた箇所は下線を付して示した。またゴシック体の箇所は活字印刷の部分である。

Ⅴ　助詞として使用された「而」「江」はその文字のままで、若干フォントを落として記した。

Ⅵ　原文および訳稿の掲載順序はそれぞれの原文作成年月日順ではなく、「外務省引継文書」第何号という形で東京大学史料編纂所の整理順（請求記号順）とした。原文のマイクロを参照するには、その方が便利なはずである。ただし、原文にページ数は振られていないので、本稿では本稿の掲載順に蘭文1、蘭文2という具合に識別した。したがって1、2といった数字が原文には付されていないだけではなく、蘭文、英文といった文字も記されているわけではない。なお、この「外務省引継文書」の由来に関する研究として、田中正弘『近代日本と幕末外交文書編纂の研究』（思文閣出版、平成一〇年）、とりわけその第二部第三章第四節「外務省における『幕末外交文書集』の編纂と編纂事業の東京帝国大学移管問題」があり、そうした「外務省引継文書」の由来に係わる各文書の整理票の部分も付属していたが、本稿では省略した。

Ⅶ　訳稿が当時外国奉行内外で回覧されたことを示す、小印の押印（㊞として表記）や花押の箇所またそれ以外の書き込みの箇所は、『福沢諭吉全集』（一九六三年刊）では省略されていたが、本稿はそれらを含め

て一つの歴史文書として翻刻した。なお外国奉行内の回覧に係わる部分の判読に関しては、加藤英明「徳川幕府外国方：近代的対外事務担当者の先駆—その機構と人—」（『名古屋大学法政論集』第九三号、一九八二年所収）を特に参照させて頂いた。

本稿作成に当たっては、前述の通り東京大学史料編纂所のご協力を頂いた。また慶應義塾における平成十八年度松永記念文化財研究基金による研究補助を受けた。共に記し、感謝の意を表す。

一覧表

外務省引継文書番号および名称	発信国	原文およびその通し番号	翻訳者・校閲者
第六六五号 旧記　濱御殿拝覲一件	オランダ	蘭文1	訳・福澤諭吉
第六六九号 旧記　年賀一件　外國之部	フランス	蘭文2 〔仏文の原文も有り〕	訳・福澤諭吉
第六七〇号 旧記　年賀一件　本邦之部	イギリス	英文1	訳・福澤諭吉
同右 同右	イギリス	英文2	訳・福澤諭吉
同右 同右	スイス	英文3	訳・山内六三郎 校・福澤諭吉
同右 同右	オランダ	蘭文3	訳・山内六三郎 校・福澤諭吉

同右 同右	ドイツ	蘭文4 〔独文の原文も有り〕	訳・山内六三郎 訳・福澤諭吉
同右 同右	イギリス	英文4	訳・山内六三郎 校・福澤諭吉
第六七二号 旧記　吊喪一件　本邦之部	ベルギー	蘭文5	訳・福澤諭吉
第八八七号 旧記　英國濠船ケストレル號ニ對シ小倉ノ臺場ヨリ砲撃一件	イギリス	英文5	訳・箕作貞一郎 校・福澤諭吉
第一〇〇六号 蘭國來翰　一八六七、六八、六九年	オランダ	蘭文6	訳・福澤諭吉
第一〇一四号 瑞西國來翰　一八六六年	スイス	英文6	訳・福澤諭吉
第一〇二三号 白國來翰　自一八六五年至六七年	ベルギー	蘭文7	訳・杉田玄瑞 校・福澤諭吉

外務省引継文書　第六六五号「旧記　濱御殿拝觀一件」所収

蘭文1〔1〕

丙寅八月五日

㊞筑前守　㊞宮田文吉
㊞甲斐守　㊞斉藤栄助
㊞加賀守　鵜飼弥一
備中守　花押水品楽太郎
㊞日向守　向山栄五郎
㊞伊豫守　御書簡掛㊞

二百九十五
百二十七
号

謝詞□といふ迄ニ付
□□□□□□□
□□□□
八月　外国方

千八百六十六年第九月十二日　江戸ニ於て

江戸外國事務宰相閣下ニ呈す

濱御殿の拝見を許されたるは余并ニ上海在留荷蘭ワイスコンシュル醫師「ボードイン」「ガラテマ」に於て深く閣下江謝する所なり此園庭は余輩これまて日本ニ於て見物せし中ニ而最も美を極めたる場所なり

恐惶敬白

寺社奉行衆
大目付衆
御勘定奉行衆
御目付衆
吟味役衆

三百六十三番

日本在留荷蘭のポリチーキアゲント兼コンシュルセネラール
ド　デ　ガラーフ　フハンポルスブルック

謝詞中述シマテナルヲ以テ回答ニ及ハサリシモノ

福澤諭吉訳

外務省引継文書　第六六九号「旧記　年賀一件　外國之部」所収

蘭文2[2]〔仏文の原文[3]も有り〕

癸亥十一月廿五日差出□□河内守殿□

㊞宮田文吉
㊞由比太左ヱ門
御書簡掛花押

譯文

千八百六十四年第一月一日横濱にて

外國事務宰相台下に呈す

貞太郎
㊞三郎太郎
㊞筑後守
㊞肥後守
花押伊豫守
甲斐守

台下我國の新年に附き余に贈り給へる書翰を謹て落手したり
此誠意に對して余が感謝する意を台下に證し且此序を以て余日本國及ひ大君殿下并ニ台下の幸福を祈願する意を台下に告く　恐惶敬白

日本在留佛蘭西の全権ミニスケル

寺社奉行衆
㊞大目付衆
㊞御勘定奉行衆
㊞御目付衆
㊞吟味役衆
三百六番㊟

ヂュセンデベレクル手記
書記役兼通弁官
アルホンセスワンデルウー直訳

福沢諭吉訳

此往翰本月廿二日ノ条ニ載ス回答ナルニヨリ
返翰ニ及ハス〔旨原書ニ記載アリ〕ヨシ（抹消）

外務省引継文書　第六七〇号「旧記　年賀一件　本邦之部」収録

英文1[4]

乙丑正月三日

千八百六十五年第一月二十七日　横濱ニある
女王殿下の使臣館ニ而
江戸外國事務宰相台下ニ呈す

記名の者即チ不列顛女王殿下のチャールジダッフェール謹て台下江新年を祝し且両國の交際昨年中の如く同様に満足すへき有様ならんことを證す　恐惶敬白

チャーレス　ウヰンチェストル

返翰本月十二日ノ条ニ載ス

外務省引継文書　第六七〇号「旧記　年賀一件　本邦之部」収録

英文2[5]

丑正月三日差出

乙丑正月三日

千八百六十五年第一月二十七日横濱ニ而

江戸外國奉行足下ニ呈す

記名の者即チ日本在留不列顛女王殿下の使臣館附き書記官謹て足下江新年を祝し且此まての如く同様に双方の間懇親交誼の持續せんことを證するなり　恐惶敬白

マルチン　ドーメン

返翰本月十二日ノ条ニ載ス

外務省引継文書　第六七〇号「旧記　年賀一件　本邦之部」収録

英文3(6)

丙寅正月三日□□

千八百六十六年第二月十五日　横濱

呈

江戸外國事務宰相台下

新年の始ニ於て余謹而台下ニ余の祝詞を述へ客歳中我の政府に表されたる親睦の交際ありしことを謝し其交際曽て絶することなく客歳中の如く連續せんことを懇願す　謹白

㊞

在日本瑞西仮コンシュルゼネラル

ロトルヘ　リントウ

返翰本月七日ノ条ニ載ス

山内六三郎訳

福沢諭吉　校

外務省引継文書　第六七〇号「旧記　年賀一件　本邦之部」収録

丙寅正月三日

七十三
二十九 号

千八百六十六年第二月十五日　金川ニ而

江戸外國事務宰相台下ニ呈す

日本の新年來るニ付余中心懇親なる祝詞を述さるを得す　余か祈望する所は当年日本國中太平無事にして且荷蘭政府と帝国日本と多年來懇親なる交際を存するのミならす益々交誼を厚くせんと欲するなり　恐惶敬白

壱番㊀

日本在留荷蘭のポリチーケアゲント兼コンシュル　ゼネラール

ド　デ　ガラーフ　フハンホルスブルック

返翰本月九日ノ条ニ載ス

山内六三郎
福沢諭吉　訳

外務省引継文書　第六七〇号「旧記　年賀一件　本邦之部」収録

蘭文4[8]〔独文の原文[9]も有り〕

丙寅正月参差出ス

訳文

千八百六十六年第二月十五日　金川ニ於て

外國奉行足下ニ呈す

日本の新年ニ付余謹而台下の幸福を祝し且孛漏生と日而本との懇親なる交際永続し固からん為メ余ハ中心の祈願を白す　敬白

日本在留王國孛漏生のコンシュル

ブラント手記

ヘヌリスネル訳

返翰本月七日ノ条ニ載ス

山内六三郎
福澤諭吉　訳

外務省引継文書　第六七〇号「旧記　年賀一件　本邦之部」収録

英文4(10)

丙寅正月三日□

千八百六十六年第二月十五日

不列顛獨派公使全権ミニストル」シル、ハルリー、パルクス

カ、セ、ゼより

御老中方台下ニ呈す

下名の者新年の折ニ於て台下ニ祝詞を述へ日本の幸福愈増加し台下と下名の者との交際愈親睦ならんことを信す

拝具謹言

在日本不列顛獨派公使

全権ミニストル

ハルリース　ハルクス

返翰正月七日ノ條ニ載ス

山内六三郎訳

外務省引継文書　第六七二号「旧記　吊喪一件　本邦之部」収録

福沢諭吉校

蘭文5[11]

□□ニ付御返簡
□□□□□
寅九月　外国方

丙寅九月五日□□□□

宮田文吉
斉藤栄助
鵜飼弥一
水品楽太郎
田辺太一
御書簡掛花押

千八百六十六年第十月十一日　横濱ニ於て

近江守
㊞大和守
㊞筑前守
㊞加賀守
備中守
花押日向守
㊞伊予守

江戸外國事務宰相閣下ニ呈す

慶應二年八月廿七日附の貴翰を落手しセイネマーイェステイト大君の長逝し給ひしと聞て之を悲歎す

余は新君の政府ニ而日本の幸福を祈る

恐惶敬白

ヲーギュスト　テ　キント

寺社奉行衆
大目付衆
御勘定奉行衆
御目付衆
吟味役衆

四百三十一番㊀

此翰八月廿七日ノ條ニ載ス
返翰ナレハ別ニ回答及ハサリシ者ナリ

外務省引継文書　第八八七号「旧記　英國濠船ケストレル號ニ對シ小倉ノ臺場ヨリ砲撃一件」収録

慶應二年

英文5[12]

丙寅七月廿九日□□□□□
千八百六十六年第九月六日
不列顛國公使館於て

㊀

外國事務執政閣下ニ呈ス

長嵜在留女王マゼスチーのコンシュルより余ニ告知して曰ク第八月十二日ニ不列顛蒸氣船ケストレル小倉の臺場の傍を通りたる節発砲セられたり○右舷ニ目掛けて十発程も打掛け其内数発は綱具に中リ一発は帆の上部ニ翻リたる不列顛旗章に中リたれとも幸に船は損傷することなしと」

余か知れる丈は右のケストレル船此ノ如ク襲撃セらるゝ様なる事を為したることなし○此船は横濱より長嵜へ赴かんとする途中にて外國船常々為す如く夜中下ノ関海峡に於て碇泊したり○此船は右様の事を為すの十分なる理あり其故は大君政府にて外國へ告知することなく始めたる戦争の模様を知らざればなり

故ニ余右船は何等の訳ありて打掛けられたるヤ了解する能はず且小倉は長嵜の近傍なるに右襲撃の後十五日を歴て第八月廿七日ニ至るまで長嵜奉行より女王マゼスチーのコンシュルへ右の事件を少しも辨解する能はざりしは驚くべき事なり

〔然れども〕（抹消）右の事件を九州ニ在る日本役人ゟ長嵜在留女王マゼスチーのコンシュルへ急速に辨解し得ざりしを歎し余其満足なる返答を得んか為に大君政府の上ニ立て事務を主る執政へ申出さゞるを得ず

余思へらく閣下右事件は急速に治定すべきことなりと考へ給ふべし故に余急速なる返答を望む　恐惶敬白

日本在留不列顛女王マゼスチーの特派公使全権ミニストル
ハルリー、ヱス、パークス手記

返翰八月三日ノ條ニ載セ
為返翰ハ十月廿二日ノ條ニ載ス

箕作貞一郎訳
福沢諭吉校

外務省引継文書　第一〇〇六号「蘭國來翰　一八六七、六八、六九年」収録

蘭文6[13]

丁卯十一月十一日

但馬守　四百三十／二百二十五号　松平太郎
駿河守　斉藤栄助
㊞甲斐守　㊞鵜飼弥一
㊞加賀守　㊞高畠五郎
㊞近江守　㊞西吉十郎
㊞丹波守　御書簡掛

千八百六十七年第十二月六日　江戸ニおゐて

蘭　江戸外國事務執政閣下ニ呈す

余長崎より帰着し十月二十三日附之貴翰并ニ別紙をも謹て落手せり然る處右書面之蘭文

和泉守
筑後守
㊞對馬守
㊞清三郎
㊞武三郎

訳甚た宜しからずして其意味を了解すべからず幸ニして英公使よりサトウ君の翻訳した
る書面之寫しを得て漸く先般之大事件を承知したり
右大事件の趣は余ニおゐて容易ならざること、思ひぬれは近便を以て余か政府江報告す
べし
右之如く閣下より余ニ報告せられし趣并ニ此後落着之模様をも報し給はるべしと之義ニ
付而余ハ謝辞を述る所なり
謹て恭礼を表す

五百八十番㊀

日本在留荷蘭のポリチーキアゲント兼コンシュルゼネラール
ド　デ　ガラーフ　フハン　ポルスブリック

只返書マテナルヲ以テ回答ニ及ハサリシ者也

福澤諭吉訳

外務省引継文書　第一〇一四号「瑞西國來翰　一八六六年」所収

英文6[14]

丙寅三月十九日差出ス同日周防守願江□□□

千八百六十六年第五月一日　横濱ニ於て

江戸御老中方台下ニ呈す

謹て台下ニ白す余第五月四日即金曜日（我三月廿日）出府すべきの故に翌五日即土曜日（我三月廿一日）余か官職ニ任せられたる書面の寫しを呈するため台下ニ面會せんことを願ふ

㊟

同日台下のため都合よき時刻を定め給ふへし

余謹て大なる尊敬を表す

日本在留瑞西合衆国のゼネラルコンシュル

セー　ブレンワルド

返翰本月廿日之条ニ載ス

福澤諭吉訳

外務省引継文書　第一〇二三号「白國來翰　自一八六五年至六七年」所収

蘭文7[15]

丙寅四月十八日

千八百六十六年第五月三十一日　横濱に於て

江戸

外國事務執政閣下に呈す

余今月十六日閣下に謹呈せ□(虫損)書簡に因り外國奉行石野筑前守の尋問を受けたれバ余筑前守を以て閣下に左件を言上せしめんことを乞ひたり、即ちセイネ・マーイェステイト白耳義国王よりセイネマーイェステイト大君にセイネ・マーイェステイト・レオポルド第□□(虫損)殂落□□(虫損)の王位に登れ□□□(虫損)を告知す□(虫損)書を大君に捧けしむる為メニ余ニ送りたりき王國の公使□(虫損)此の如き主書を他の君主に贈るにハ自ら手渡しするの例なれども方今セイネマーイェステイト大君ハ大坂に在ませ(マシ)バ閣下に謁見を願□□(虫損)右の書を渡し之を其筋江呈上するを請ふこと都合宜しかるへしと思へる趣を余外國奉行江述へたり

外國奉行右の趣を拒ミて余に回答を□(虫損)たるは余ニ於て大ニ驚く所なれども此事□(虫損)必す誤解なるへしと余は之を信據す○仮令ひ閣下文明諸国民の相互ニ尽すへき謹慎と敬礼とを軽率ニ思ひ給ふともこれまで余が屢々見る所ニ據て考□□(虫損)数日前余ニ贈れる右不承知の書翰は閣下ニ於ても必す之を捨給ふべし

但し余が最簡最易と思ひし事不都合なるべきときは余近日大坂に赴き直にセイネ・マーイェステイト大君に我顕明なる君主の王書を手渡せん□(虫損)とを更に良とすべし

セイネ・マーイェステイト大君の□(虫損)意と其外國に對しての賢明なる方略ニ因て考れはセ

イネマーイェステイト大君ハ世界の強大なる諸君主に親交せる我顕明なる國王より贈りたる告知の書翰を最も緊切として請取り給ふべきこと余に於テ少しも疑を容レさる所なり　恐惶敬白

オーグスト・ト・キント

杉田玄瑞譯

福澤諭吉校

注

（1）蘭文1

No 127/295

Yedo, 12 September 1866

Ik heb de eer Uwe Excellencien mijne beleefde dankbetuigingen aantebieden ook namens den Vice Consul der Nederlanden te Shanghai en de Doctoren Bauduin en Gratema, voor de goedheid om te veroorloven Hama Goten te bezigtigen, welke tuin werkelijk de schoonste plek is, die wij nog in Japan hebben gezien.

Met den meesten eerbied heb ik de eer te zijn,

De Politieke Agent en Consul Generaal
der Nederlanden in Japan

D. de Graeff Van Polsbroek

Aan
Hunne Excellencien de Ministers
van Buitenlandsche Zaken te
Yedo.

（2）蘭文2

Vertaling

Yokohama, 1e Janvier 1864

Excellentien,

Ik heb den brief ontvangen, die Uwe Excellentien mij de eer hebben gedaan mij te schrijven, bij gelegenheid onzer nieuwe jaar.

Terwijl ik Uwe Excellentien de betuiging mijner dank toebreng voor deze oplettendheid, neem ik de gelegenheid waar om hun te doen kennen de de wenschen die ik vorm voor het geluk van Japan, van Zijne Majesteit den Taicoun, en van Uwe Excellentien persoonlijk.

Met achting en eerbied

/get/ Duchesne de Bellecourt
(h.g.) gevolmagd Minister van Frankrijk
in Japan

Voor juiste vertaling
De Secretaris Interprete OFFICIAL SEAL
Alphonse Van der Voort

Aan Hunne Excellentien de Edele Leden der Gorogio
Ministers van Bruitenlandsche Zaken

(3) 仏文1

LÉGATION
ET
CONSULAT GÉNÉRAL
DE FRANCE
AU
JAPON

Yokohama Yedo.le 1er Janvier 1864

Excellence

J'ai reçu la lettre que vos Excellences m'ont fait l'honneur de m'écrire à l'occasion de notre nouvel an.

En faisant parvenir à vos Excellences l'expression de mes remerciements pour cette attention, je saisis l'occasion de leur exprimer les souhaits que je forme pour le bonheur du Japon, de Sa Majesté le Taïcoun et de Leurs Excellences personnellement.

Avec respect et considération.

Duchesne de Bellecourt
Ministre plénipotentiaire
De France au Japon

OFFICIAL SEAL

A Leurs Excellences
Les nobles membres du Gorogio, Ministres des Affaires Etrangères

3　　3　　Yédo

（4）英文1

Her Majesty's Legation,
Yokohama, 27th January 1865

The Undersigned, Her Britannic Majesty's Chargé d'affaires, has the honor to congratulate Your Excellencies on the new year, and trusts that the future relations between the two countries may be conducted on the same satisfactory footing as during the past year.

With respect & Consideration

Charles A. Winchester

Their Excellencies
The Ministers for Foreign Affairs
Yedo

(5) 英文2

Yokohama, 27th Janry 1865

The Undersigned, Her Britannic Majesty's Japanese Secretary of Legation, has the honor to congratulate Your Excellencies on the new year, and trusts that the same mutual friendly feeling and good understanding may be continued, as existed heretofore.

With respect & Consideration

Martin Dohmen

Their Excellencies
The Governors of Foreign Affairs
Yedo

(6) 英文3

Yokohama, le 15th February 1866

CONSULAT GÉNERAL
DE LA CONFEDERATION SUISSE

AU JAPON

Excellencies,

On the beginning of the new year I beg to present you my sincere felicitations, to express my thanks for the friendly relations with [sic] you have hold [sic] with our (my) government during the past year & (and) to wish that those relations will never be interrupted but remain as they have been during the past.

With respect

The Swiss General Consul in Japan (□)

Rudolph Lindau

To their Excellencies,

The Ministers of Foreign Affairs

Yedo

(the Members of the Gorodju

Yedo)

※ なおこの英文はほぼ同じ内容のものが二通保管されている。両者で異なった箇所を（ ）で記した。

（7） 蘭文3

No 29/73 Kanagawa, 15 Februarij 1866

Bij het intreden van het Japansche Nieuw-jaar kan ik niet nalaten Uwe Excellencien mijne hartlijke en welgemeende gelukswenschen aantebieden. Ik hoop dat dit jaar rust, vrede en eendragt in het Japansche rijk mogen heerschen en de vriendschapsbetrekkingen tusschen de Nederlandsche Regering en het Japansche Keizerrijk, die reeds sedert zoo menigvuldige jaren dagteekenen, niet alleen mogen blijven bestaan, maar zich meer en meer mogen uitbreiden.

Met den meesten eerbied heb ik de eer te zijn,

De Politieke Agent en Consul Generaal
der Nederlanden in Japan
D de Graeff Van Polsbroek

Aan
Hunne Excellentien de Ministers
van Buitenlandse Zaken te
Yedo

(8) 書文4

Vertaling

Kanagawa den 15den Februarij, 1866

Uwen HoogEdelGestrengen heb ik de eer bij gelegenheid van het japansche Nieuwjaarsfeest mijne beste wenschen te uiten voor Uwer HoogEdelGestrengen persoonlijk welzijn zoowel

als voor de voortduring en bekrachtiging der vriendschappelijke betrekkingen tusschen Pruissen en Japans.

Met eerbied,

De Koninklijke Pruissche Consul in Japan.

w.g Brandt.

voor de Vertaling

[Signature]

Aan

Hunne HoogEdelGestrengen,

de Goeverneurs van Buitenlandsche

Zaken,

te

Yedo.

（9） 独文1

Kanagawa den 15ten Februar 1866

Eueren Hochwohlgeboren habe ich die Ehre bei Gelegenheit des japanischern Neujahrfestes, meine besten Wünsche für Ihr persönliches Wohlergehen sowie für die Fortdauer und Kräf tigung der freundschaftlichen Beziehungen zwischen Preußen und Japan auszusprechen.

Mit Ehrerbietung

Der Königlich Preußische Konsul in Japan

Brandt

An

Ihre Hochwohlgeboren,

die Gouverneure der

Auswärtigen Angelegenheiten

in

Yedo

(10) 英文4

From Sir Harry Parkes K.C.B. Her Britannic Majesty's Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary etc—etc.

To Their Excellencies the Members of the Gorojiu.

February 15th 1866

The Undersigned begs to congratulate Their Excellencies on the occasion of the new year. He trusts that it will be marked with much additional prosperity to Japan and with increased intimacy in the relations between Their Excellencies and the Undersigned.

With Respect and Consideration

Harry S.Parkes

H.B.Ms.Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary in Japan

（11）蘭文5

Mission extraordinaire
de Belgique

Yokohama, den 11den October 1866

Aan Hunne Excellentien de Ministers van Buitenlandsche Zaken
te Yedo

Door den brief van Uwe Excellentien van den 27sten dag der 8ste maand van het 2de jaar van Kei O, heb ik met droefheid vernomen dat Zijne Majesteit, de Taikoen overleden is.

Ik maak wenschen voor het geluk van Japan onder de regering van Zijne nieuwe Majesteit.

Met eerbied en achting.

Auguste t' Kind

（12）英文5

British Legation
September 6th 1866

Her Majesty's Consul at Nagasaki has reported to the Undersigned that on the 12th August the British steamer "Kestrel" was fired upon as she was passing the batteries of Kokura. As many as ten cannonshot are stated to have been discharged at her, but fortunately the vessel was not struck, though several of the

shot passed through the rigging and one hit the British Ensign which was flying at the peak.

As far as the Undersigned is informed nothing had been done on the part of the "Kestrel" to justify this attack. She was on a voyage from Yokohama to Nagasaki and, as is usual with foreign vessels, had anchored during the night in the Strait of Shimonoseki. She had a perfect right to do this as she had no knowledge of the state of war existing there which the Tycoon's Government had entered on without giving notice to foreign powers.

The Undersigned is at a loss therefore to understand with what object she could have been fired at, and it is singular that up to the 27th August, or fifteen days after the attack was made the Governor of Nagasaki was unable to afford Her Majesty's Consul the least explanation although Kokura is in the vicinity of that Port.

It is essential however that the affair should be fully and satisfactorily accounted for and the Undersigned must accordingly look to the Ministers at the head of the Government of the Tykoon [sic] for the necessary explanations which it is to be regretted were not promptly rendered by the Japanese Authorities in Kiushiu to Her Majesty's Consul at Nagasaki.

He trusts Their Excellencies will see that this is an affair which should be settled without delay, and he accordingly looks for an early reply.

With Respect and Consideration

Harry S.Parkes

Her Britannic Majesty's Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary in Japan

To Their Excellencies

The Ministers for Foreign Affairs

etc—etc—etc—

(13) 蘭文6

No 225/430 Yedo, 6 December 1867

Bij mijne terugkomst van Nagasaki had ik de eer te ontvangen de missive van Uwe Excellencien dd 23te dag der 10de maand en bijlagen.

De vertaling in het Hollandsch van die stukken was echter zoo slecht en zorgeloos gemaakt, dat ik hoegenaamd niets van den inhoud heb kunnen begrijpen.

De Minister van Engeland heeft echter de goedheid gehad mij een afschrift te doen nemen van de door den Heer Satow gemaakte vertaling en ben ik derhalve op de hoogte gekomen der belangrijke gebeurtenissen van den laatsten tijd.

Met de meeste belangstelling heb ik daarvan kennis genomen en zal met de eerst vertrekkende mail mijne Regering daarmede in wetenschap stellen. Ik bied Uwe Excellencie mijne dankbetuiging aan

voor de aan mij gedane mededeeling en voor de toezegging mij met hetgeen verder zal worden beslist bekend te maken.

Met den meesten eerbied heb ik de eer te zijn.

De Politiek Agent en Consul Generaal
der Nederlanden in Japan
D. de Graeff van Polsbroek

Aan
Zijne Excellencie den Minister
van Buitenlandsche Zaken
te Yedo

(14) 英文6

Yokohama, le 1st May 1866

CONSULAT GÉNERAL
DE LA CONFEDERATION SUISSE
AU JAPON

Excellencies

I have the honour to inform you that I am going to Yedo Friday the 4th of May and that I wish to have an interview with your Excellencies the next day Saturday the 5th to hand you over the copy of my

nomination.

You will please appoint for that day such hour as might be convenient to you.

I have the honour to be with high consideration.

The General Consul for the Swiss Confederation in Japan
O.Brennwald

OFFICIAL SEAL

To their Excellencies
The Members of the Gorodju
Yedo

（15）蘭文7

Buitengewoone Missie Yokohama, 31 Mei 1866
van Belgie

Aan Hunne Excellencien
de Minsters van Buitenlandsche Zaken
te Yedo.

Ingevolge de mededeeling, die ik de eer heb gehad aan Uwe Excellencien onder dato 16 dezer te rigten, heb ik het bezoek van den Gouverneur van Buitenlandsche zaken, Ishino Tsikoesenno kami ontvangen, wien ik heb verzocht aan Uwe Excellencien te willen mededeelen, dat zijne Majesteit de Koning der Belgen mij eenen Koninklijken Brief, ann zijne Majesteit den Taikoen gerigt, heeft doen toekomen, om Hem het overlijden van zijne Majesteit, Leopold I en zijne troonsbeklimming ter kennisse te brengen. Ik heb aan den Gouverneur van Buitenlandsche Zaken verklaard, dat alhoewel het gebruik vordert, dat de Gezant des Konings, in persoon, zulk eenen Koninklijken Brief overhandigt aan den Sourverein aan wien dezelve is gerigt, zijne Majesteit de Taikoen zich te Osaka bevindende, heb gedacht wel te doen, eene audientie aan Uwe Excellencien te vragen om Hen den Koninglijken Brief te remitteren en tevens te verzoeken om denzelven aan zijne hooge bestemming te willen bevorderen.

Het weigerend antwoord dat de Gouveneur van Buitenlandsche zaken mij tot mijne groote verwondering heeft gegeven, kan alleen naar mijne overtuiging aan een misbegrip worden toegeschreven. Te dikwijls ben ik in de gelegenheid geweest om te erkennen hoezeer Uwe Excellencien de oplettendheid en achting, die de beschaafde Natien onder elkanderen verschuldigd zijn, waarderen, om niet verzekerd te zijn, dat Uwe Excellencien ten zeerste den weigerenden brief welke aan mij voor eenige dagen gerigt is geworden, afkeuren willen.

Indien echter, hetgeen ik het eenvoudigste en gemakkelijkste geloofde te zijn, moeye lijkheden zou ontmoeten, zal ik zeer goed in eenigen tijd de geneigdheid kunnen nemen, mij naar Osaka te begeven en in persoon aan zijne Majesteit den Taikoen den Brief van den Koning, mijn Doorluchtige Souverein, te

overhandigen.

De verheven gevoelens van zijne Majesteit den Taikoen en zijne opgehelderde politiek ten opzigte der vreemde Mogenheden zijn te goed bekend, om mij een oogenblik te doen aarzelen dat zijne Majesteit niet met het grootste belang den brief van bekendmaking zoude ontvangen, dien Hem de Koning, mijn Doorluchtige Meester, door de naauwste bloedverwantschap of vriendschap aan de magtigste Vorsten der Wereld verbonden, heeft gerigt.

Met eerbied en achting

Aug. t' Kint de Rk

『近代日本研究』第二十三巻　正誤訂正

『福沢諭吉全集』（一九六三年刊）未収録幕末外交文書訳稿十三編

三〇三頁　七行目

【誤】孛漏生と日而本との懇親なる交際永続し

【正】孛漏生と日本との懇親なる交際永続し